

兵装試験の時間です

とろろろ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここは日本海・・・沿いの港町

そこに建つのは「第4兵装試験鎮守府」

技術系にいきたかつた提督と愉快な艦娘たちが、日々正式採用前の兵装のテストを行っていた。

「見てえええ明石いいい！このライフリングえつちいいい」

「なんですか提督。大げさで・・・ほんとだ！えつちいいい」

「エチチチチチチツ勃」

主な登場人物

提督：

20代半ばの男性。士官学生時代は技術者志望であり第4兵装試験鎮守府着任前は他鎮守府にて技術士官として勤務していた。

陸奥：

長門型2番艦。秘書艦。艦隊のお姉さんだが一部の人物の前だと甘えん坊になる。凄い強い。

霧島：

金剛型4番艦。高い計算能力を駆使して鎮守府の經理を任せられる。彈より拳派。

明石：

工作艦。提督の親友であり工廠の主。時折メガネレンチをしやぶっている。

夕張：

軽巡洋艦。戦闘に工廠仕事にと大忙しな人。最近持つてゐるメガネレンチがやたら錆びる。

大淀：

軽巡洋艦。

大本營と鎮守府をつなぐ橋渡し役。

提督をメガネつ娘沼に引きずり込ん

だ張本人。

# 目 次

試そう、兵装	朝	龍田さんブチ切れ案件
シユミレーション	幸運は降つてくる	幸運は降つてくる
事務仕事は体が鈍るんです b y 霧島	呑み処「鳳翔」	呑み処「鳳翔」
9	それぞれと	それぞれと
調律の工廠	金剛型爆進！	金剛型爆進！
撃つかどうかは3番砲塔に聞け	大淀データ管理帳	大淀データ管理帳
魚雷、返却致します	老兵、海原を往く	老兵、海原を往く
夜は危ないから灯りをつけましょう		
27		
赤城、食べます！		
執務室と工廠は戦場		
演習はデータ取りに最適ですね		
40    37    32	23    18    14	79    72    67    63    58    54    51    47



# 試そう、兵装

会議室に集められた陽炎型の4人、陽炎、不知火、黒潮、秋雲。

奥でPCから手を離し、好きに座れと手を振る提督。

綺麗な敬礼から用意された椅子に座る陽炎と不知火、黒潮。

一瞬遅れる秋雲。彼女は徹夜明けのようだ。

「えーと…今回集まつて貰つたのは4人にやつてもらいたい兵装試験依頼が来たからだ。陸奥、資料を。」

「はい」

先ほどコピーした依頼書等をまとめた資料を陸奥が配る。指先まで女子力が通つたかのような動きをする。それを秋雲がメモリながら見る。余念がない。

「司令、今回の魚雷ですが磁気信管という認識で間違ひありませんか？」

資料を見ていた不知火が手を上げ発言する。

「うん、あつてるよ。今回のは比較的敵に近い距離で作動するやつみたい

「ほな、結構シビアに狙わんとなあ」

「水雷屋の私たち向きの依頼ね！」

「てことは出撃増える・・・？」

ニンマリ微笑む黒潮と自信満々の陽炎、その横で青ざめる秋雲。

「試験内容としてはいつも通り。普段の哨戒、迎撃なんかで実際に装備して動いて貰う。各自レポートは帰還後1日以内に提出を。試験期間は来週初めより1ヶ月、不足データがあれば延長。必要項目は資料参照で。各自質問は？」

4人が顔を見合わせる。

「ありません。」

代表して不知火が答える。

「なにがあつたらいつでも聞いてくれ。では解散！あつ秋雲は残るように」

「・・・え・・・」

心配そうな陽炎をよそに不知火がサツと立ち上がる。黒潮もそれに続く。「先部屋いつてるね」と陽炎が一言残し3人共一礼して会議室から出る。何かを察した秋雲だけが残る。

「陸奥も戻つていいぞ」

「やだつて言つたら？」

「戻つて下さい」

「はーい」

「変なことしちゃだめよ?」と言ひ残し陸奥も退出する。

提督は秋雲に聞く。

「先生、新作の内容は?」

ああやつぱりと秋雲が端末を取り出す。

「龍田さんと潜水艦たちのギヤグもの、45Pの予定。フルカラーのつもりだつたけど出撃増えちゃうからムリかなあ」

「うつ・・・惜しいことしたなあ・・・」

「まつお仕事だし仕方ないよね」

「完成したらいくつか購入させてもらうわ」

秋雲から渡された端末に映るサンプルを眺め提督が誓う。

「ご予約ありがとうございます。じゃあ完成まで待つてね」

先までとは打つて変わつて満面の笑みで手を振りながら端末を回収した秋雲が退出、最後に軽く片付けをした提督が退出して会議室は空となつた。

提督が執務室に戻ると陸奥と大淀がソファに腰掛けコーヒー片手に会話をしていた。足を組むのが絵になる陸奥とソファなんだからもつと寛ごうよと言いたくなるほどピシツとした大淀。

さながら圧迫面接のようだが会話は比較的温和なようだ。

「あつ俺も喉乾いた……」

「お姉さんの飲む?」

陸奥が飲みかけのカップを差し出す。

それを提督は恥ずかしげもなく飲む。

大淀も見慣れた光景であり、なんの感想もなくお茶請けのお菓子に手を伸ばす。

「あ——もう1杯! もうちよい甘めで……」

空のカップを見ながらあらあらと陸奥が組んでいた足を解く。

「じゃあ私のと提督の淹れてくるわね」

給湯室に陸奥が入り残される2人。

「提督、大本営に突き返す分の依頼書、後で纏めておいて下さいね」

「全部突き返したい……」

「あの……出来ればその……半分は受理して頂きたくて」

「善処します」

「大本営からの依頼ですよ? 全部こなして頂くのがあなたの勤めです。大本営があなたを信頼して新兵器を預けたいと仰っているんですよ? それをあなたは毎回毎回突き返そうとして! 毎回間に挟まる私の身になつてください。そもそもあなたは……」

スイッチの入った大淀のお説教を聞き流している提督。中々お菓子に手を伸ばせず  
にいた。

「はいはい。大淀ほどほどにね？」

「……わかりました。」

湯気とコーヒーのいい匂いが漂うカップを両手に陸奥が戻つてくる。  
「はい、提督の分、砂糖マシマシよ」

「ありがとー」

陸奥が加わったことにより会話の焦点は仕事から日常へと変わる。

10分ほどの休憩だつたが充分に仕事一辺倒の執務室にゆつたりとした空気を与えてくれた。

# シユミレーション

季節は1月・・・冬である。

当然寒い。ましてやここは日本の割と北側。しかも夕刻1900。雪こそ無いがかなり冷え込む。

そんな鎮守府の工廠にはだけたツナギにタンクトップの緑髪の女性とツナギの上から上着を羽織るピンク髪の女性、かなり厚着の男性が見える。

厳つい戦艦艦装の下に潜りながらピンク髪の女性、工作艦「明石」が声を張る。  
「あつ夕張ー、14インチのレンチ2つとつてー」

「こつち使つてるから1つモンキーでいい?」

「モンキーか・・・提督の方はどうなですー?」

「こつち14インチメガネなら2本あるぞ」

「じゃあそつち貰いまーす」

「今やるぞー・・・ほれ受け取れ!」

「おっありがとーございます。あつそういえば魚雷の方、あと装備すればOKな状態ですよー。火薬ばつちり変えときました!」

着けていたゴーグルを外しサムズアップする明石。

明石達の仕事の早さに感動を覚えながら切り換え用の機械の調整を行う提督。ナメたネジをバーナーで切り落とすを夕張。

機械好き達の樂園がここにあつた。

満面の笑みを浮かべる3人、そこへ陽炎たちが浮かない顔で現れる。

「おっ！時間ぴつたりだな。4人とも準備出来てるからそれぞれ艦装展開して魚雷の前に並んでくれ。」

4人が並んだのを見て提督が切り換え用の機械を操作する。

陽炎たちも不審がることなく切り換えを待つ。

複数のアームに艦装を繋ぎ、今装備している魚雷が発射管から外されていく。提督が慣れた手つきで機械を操作し陽炎たちの艦装に先ほど「危ない」と評価した魚雷が装填されていく。

最後の秋雲に装填が終わり艦装が解放される。

それぞれ立ち上がり、軽く体を動かす。

「なーんか思つてたより随分軽いのね」

陽炎の感想にすかさずメモをとる不知火。

些細な感想、それですら貴重なデータとなる。

それを知つてゐる、兵装試験を仕事とするこここの艦娘たち。それの習性みたいなものである。

「そりや火薬抜いたからなあ！」

つつこむ提督と4人がある程度感想を言い合つた後、今後の確認を行う。

「予定だとこの後20:00から陽炎たちと霧島で近海の夜間パトロール。それぞれ合つてるか？」

4人が頷く。

「よし。それじゃあ会議室に移動を。霧島とルートに関してとテスト項目の確認しう。」

「分かりました。では皆さん、いきましよう。」

なぜか陽炎を差し置いて不知火が3人を先導する。

妹の成長を喜ぶ反面、悔しさも感じ目を閉じ腕組みして頷く陽炎を尻目に移動を開始する2人と提督。

ハツと気付いた陽炎も会議室へと急いだ。

# 事務仕事は体が鈍るんです b y 霧島

鎮守府を出撃して2時間ほど、

灯りがなければ何も見えないほど暗い海を陽炎たち5人は航行していた。

こんな視界のきかない夜にもパトロールを行わなきやいけないくらいには日本海側は深海棲艦が出没するのである。

とはいえ殆どの深海棲艦は、「はぐれ」と言われる小規模な連中である。

本来ならいいことを祈るのだが彼女達は少し事情が違う。

今背負つてる魚雷を試さなければいけない。そのための標的がいる。彼女達の目は獸さながらに動き続けていた。

「2時の方向、結構遠く、僅かに白波！」

戦闘を走る陽炎が声を上げる。と同時に全員が索敵を強化する。

「いるわね・・・サイズ的に駆逐、多分イ級1隻」

電探から送られた情報を霧島が伝える。

「霧島さん！司令に入電、発見したって！」

「ええ・・・司令、駆逐イ級と見られる敵艦を発見。数は1、対応を。」

僅かなノイズの後、提督が指示を出す。

「霧島主体で敵艦を無力化、その後魚雷の標的として使う。的に使えるくらいには元気残しどけ。霧島先頭で単縦陣、霧島に敵を引きつける。まずは武装解除だ、いいな」

「…了解」

それぞれが提督の指示に短く肯定を返す。

霧島が敵艦目掛け探照灯を照射する。  
向こうも気付いたようだ。

陽炎たちは霧島の影に隠れその時を待つ。

まっすぐに突っ込む。徐々に距離が縮まる霧島とイ級。

(相手はイ級、それもはぐれで雷装なし。なら攻撃手段は非力な主砲と噛みつき…となると修理費より弾薬費の方がかかりそう…・・・撃たないでおきましようか。)

霧島は加速しながら考える。彼女は計算が得意だ。鎮守府の経理を任せられるほどである。故についコストの計算をしてしまう。

距離的には撃てるのである。だが撃たない。彼女なりの節約をしてしまう。

イ級との距離はさらに縮まり大型砲の間合いを過ぎてしまう。イ級の主砲が霧島目掛け放たれる。霧島は金剛型改二艤装に付けられた2枚の盾を使い防御しつつ速度を何故か落とす。

主砲が有効でないと判断したイ級が口を開け噛みつきの姿勢をとり加速するのを見て霧島は盾を開き手招き、「来い・・・」と睨む。

それを理解してか否かイ級が歯をぎらつかせ飛びかかる。常人ならば気絶するほど不気味さ、それを受けて霧島はにこやかに笑っていた。

瞬間、ドンッとイ級の体の勢いが左右からくる衝撃に殺される。

霧島の艦装に付けられた2枚の盾が閉じガツチリとイ級を挟んでいた。霧島が軽くズレた眼鏡を整えると腕をまくり、大きく開いたイ級の上顎と下顎をそれぞれ手で掴みさらに上下に開く。イ級も抵抗するが戦艦、しかも戦闘用にトレーニングを欠かさない霧島の腕力の前に為すすべなく顎が外れる。続けざまにイ級の主砲に手をかける霧島・・・

「せーの！」

ブチイツ・・・

イ級の主砲は呆気なく体から離れる。かろうじて動いているイ級を掴み後方・・・陽炎たちへと投げる。無事？に着水したイ級はチャンスとばかりに必死に逃げようとズタズタの体で泳いでいた。その速度は魚雷の標的として申し分ないモノ。

待つてましたと言わんばかりに陽炎、不知火の発射管から魚雷が放たれる。幾つかの水柱が上がり息も絶え絶えのイ級が残される。それを囮るように近づきメモをとる4

人とハンカチで手を拭う1人。はたから見れば異常とも言える光景。だがイ級以外誰も疑問を抱かない。

彼女達からすれば被弾リスクを抑えつつそれなりにデータの取れるいいテストが出来たのである。ともすれば満足とすらとれる表情を浮かべていた。

「やはり起爆、バラつきますね・・・」

「流石にシミュレーターほど誤差は無かつたけど・・・火力ひつく！どんだけ火薬量減らしたの？聞いてくればよかつたなあ」

「ねえさんたち、次敵はんおつたらウチと秋雲が撃つで」

「いいよいよ！あたしの分姉さんたちにあげるよ！」

「りりません。秋雲、自分で使いなさい。」

「不知火つて秋雲に厳しいよね！最近さ」

「不知火姉さん主役の本なんて描いてないのにさー」

通信端末をしまいながら霧島が4人に近づく。

「4人とも、メモ終わつたらパトロール再開するわよ。イ級はこのまま鹵獲、私が引つ張るわ。」

「了解！」

4人がメモをとっている間に霧島は提督から事後の指示を受けていたようだ。

何事もなかつたかのようにパトロールへ戻る5人。  
あとのパトロールで接敵はなく黒潮と秋雲の2人は魚雷が誤爆しないことを祈りながら帰路へとついた。

# 調律の工廠

明朝0500···

冬の寒さ染みる中、工廠端の仮眠室にアラームが鳴り響く。アラームが消え数秒、仮眠室入り口からジャージにサンダル姿の明石が起きてくる。

背を丸め手をさすり寒い寒いと咳きながらすでに点いている証明に目を細めつつ工廠入り口、大きなシャツターを開く。

「おっ明石、おはようさん」

シャツターを開ける音に反応してか工廠に鎮座する扶桑型艦装が提督の声で話かけてくる。

「提督、おはようございます。朝早いですねーふあ、あ···」

主砲塔に囲まれた機関部にPCを繋ぎ出力制御系の最終チェックを行う提督。それを見つけ挨拶を返すも我慢できず天井へ伸びをする明石。

両手を上げたその一瞬、明石の両脇に左右から指が突き刺さる。

「つん！···ゆうばりー」

「目え覚めたかなー？明石ちやーん？」

徹夜明けでテンションのおかしい夕張はそのまま仮眠室へと消えて行く。

あまりにも一瞬のことに明石は、仕返しという考えにいたることができなかつた。

「妙高の方、最終チェック終わつてるよ。顔洗つて準備できたら接続作業の用意頼むわ」仕事へと考えを戻される。

眠気と悔しさから若干皮肉混じりに答える明石。

「さつすが提督、お仕事早いですねえ」

「まあーね！夕張に叩き起こされて4時間前から作業してるからね！ハハツ」

提督も若干テンションがおかしいが隣にある妙高型艦装を見て理解する。仕事は完璧だ、と。

これなら妙高さんの驚く顔が見れる。楽しみが増えた明石は、ひとまず顔を洗つて着替えることにした。

明石が作業に加わつて1時間ほど。

機関部に火をいれ、出力が綺麗に立ち上がるのを確認。ようやくの完成。提督がすぐく扶桑型艦装。

機関部に火をいれ、出力が綺麗に立ち上がるのを確認。ようやくの完成。提督がすぐに妙高、扶桑両名に連絡をいれる。

10分もかからず2人が揃う。

「明石、2人来たからそれぞれのとこで接続作業するから手伝つてー」「はーい。妙高さんの方は用意できたのでこちらへ！扶桑さんは提督の方での作業になります。」

それぞれが位置につき作業が始まる。

5分ほどで作業完了、立つて動かしてみてと笑顔の明石が妙高を立ち上がらせる。艦装と接続し出力を上げた2人は、まずそのレスポンスに驚く。

早くも遅くもない。自分が思った通りに動く。そこに誤差がないのである。

次に砲塔などの可動箇所。また驚かされる。無骨な歯車の塊でありながらまるで自らの指が如く滑らかに動く。

最適な速度、重量、出力。思わず笑みが零れる。

「とりあえずはこれでチューニングメニューは終了！あとは無事に鎮守府に帰ること。一応こっちから護衛出しますので昼の1300出発で。質問は……ないか。それじゃ1週間お疲れ様！」

提督が締め2人がお礼にと頭を下げる。

明石は、このやりきった感がとても好きだった。

それは提督も同じ。立ち去る2人を見ながらお互いの健闘を称える明石と提督。今この場にいる全員が、着替えもせず仮眠室入り口に突つ伏して寝る夕張の事を忘れ

て  
い  
た  
・  
・  
・

## 撃つかどうかは3番砲塔に聞け

艦娘には何百年も昔、自分たちがまだ船として人々を乗せ戦争していた頃の記憶がうつすらと残っている。

中には自分が沈むその瞬間を生々しくトラウマとして記憶している者もいた。

陸奥はその内の1人。

3番砲塔爆発事故により沈んだ戦艦陸奥の記憶が彼女を蝕んでいた。

何故か3番砲塔に集中する不備、それを気にするたびに陸奥は海に出ることが怖くなつた。

そんなある日、彼女は41cm砲向けの対空弾の試験を行つていた。不安もあつたがそれなりに順調に確実にデータが集まっていく。

そろそろ帰還かと僚艦に聞いた瞬間それが起きた。

陸奥の3番砲塔が爆発、隣接する砲塔を巻き込み大きな火柱を上げた。あまりに唐突な事態に僚艦だった那智と高雄は硬直。試験を青葉の映像越しに見ていた提督の消火という指示でようやく2人は動き出す。ある程度火が消えた後、陸奥の容態を確認。沈みこそしてはいないが大破状態、艦装はズタズタで爆発により片腕が吹き飛んでいた。

全身にわたる火傷もありとども航行できるものではなかつた。本人の意識もない。

幸いにもかなり近海での試験だつたため鎮守府より明石がボートを引つ張り現地へ急行。ボート上で応急処置を行いつつ那智と高雄が牽引し鎮守府へと戻ることができた。

即座にドックへ運びこまれた陸奥には惜しみなく修復剤が使われ火傷や欠損箇所が回復していく。破損した艦装についても予備品を使用、彼女は一命をとりとめた。

修復完了とともに目覚めた彼女は意外にもあつさりとこの事を受け入れた。曰わく予感はしていたとのこと。

陸奥の目覚めを聞き飛んできた提督へ彼女は問いかける。

もう私は戦わない方がいい？と。

それは陸奥が選ぶことだと提督は告げ、強いて「選択肢は2つくらいかな」と

1つ目は、もし戦うことが怖いならば艦装を解除し普通の女性として鎮守府に勤務もしくは、人として世間に暮らすか。

2つ目は、もし戦いたいと思うなら心置きなく戦えるよう条件はあるが改修を行う。という2つ。

陸奥の内心は複雑であつた。戦いたい戦艦としての自分とトラウマに悩む女性としての自分がせめぎ合う。

「私のこの3番砲塔の不安つて機械的に直せるものなの？」  
「直せる。」

「ならなんで今までその事提案してくれなかつたの？」

「もしその改修するとなると陸奥の登録が『現地改修型』って扱いになる。そうなればもう通常の兵装試験はさせれない。それくらい大規模に改修する必要がある。命に関わらないうちは必要ないと思つたから提案しなかつたんだ。申し訳ない・・・」  
深々と頭を下げる提督。

少しの間があつて陸奥が口を開く。

「もし兵装試験できなくなつてもこここの艦娘でいられる？」

提督が顔を上げ頷く。

「条件が2つある。私の改修、これ以上ないくらいに仕上げて。二度と3番砲塔爆発なんて起こさないように。それと私を秘書艦にして。私みたいな子出さない為に。艦隊をしつかり見渡せるように。」

「戦うことは問題ないのか？」

「あんまりないわよ・・・だつてこんな事で引退なんて悔しいわ・・・」

陸奥の表情はなにか覚悟を決めたようであつた。提督は罪悪感を感じながらも陸奥に誓う、完璧に仕上げると。

そうして陸奥の改修が始まる。

3番砲塔に對しての神經系の接続、エネルギー伝達等ほぼ1から作り直すに等しい作業を1ヶ月・・・組み上げられた陸奥用艦装が薄暗い工廠で威圧感を放っていた。仕様書には「陸奥用現地改修登録艦装」の文字。完全に規格外品となつたこの艦装では正規の兵装試験はもう行えない。だがそれでもと海へ向かおうとする彼女にそれが取り付けられる。接続して氣付く。

今まで3番砲塔にあつた言葉にできないような不安感、それがない。彼女の精神的には恐怖はある。だが機械としての艦装には不安や恐怖を感じない。提督が持てる全てを費やして入念にこの陸奥のためだけに作つた艦装である。その工程を陸奥はしつかりと見ていた。故に怖くない。これなら信頼できる。

しばらくは慣らしを行うがそこも陸奥と提督の二人三脚でこなす。

1週間ほど慣らし一切の不備なく初実戦を迎える。

そこで彼女は3番砲塔からの砲撃によつて敵深海棲艦を沈めることに成功する。喜びと共にトラウマを越えた達成感のようなものに包まれる。

3番砲塔を撫でると提督への複雑な感情が湧き上がる。

元々提督への信頼はそこそこあつたが今回一連の提督の動きを見ていた陸奥は、結果として提督への信頼を強めた。2人の信頼の結晶と言えるこの艦装、特に3番砲塔は陸

## 22 撃つかどうかは3番砲塔に聞け

奥の中でかなり大切な存在となり彼女の支えと変化していった。

## 魚雷、返却致します

2日後、午前0900

件の魚雷試験、その早期終了が許可されたと連絡を受けた陽炎たちは意氣揚々と執務室の扉を叩いた。

陸奥の声で「どうぞ」と返事。比較的鎮守府内では豪華な扉を開け、全員が一礼をして入室する。

「魚雷換装の作業依頼に参りました！」

明るく告げる陽炎。直後にキヨトンとする。

「あれ？ 陸奥さん、司令は？」

「提督なら近所の鎮守府で工廠作業の手伝いで出張よ？」

「えっ？ 嘘お・・・じゃあまだ魚雷このまんまかあ・・・」

「大丈夫大丈夫！ 提督からちやーんと作業許可貰つてるから。明石にも伝えてあるみた  
いよ。」

「流石、司令はんやな！」

失礼しましたと陽炎たちが工廠へ向かう。

工廠では夕張が自分の工具に錆止めを塗つていた。

「あつ！夕張さん！」

「ん？陽炎ちゃんたち、魚雷の換装？」

「そうそう！お願いできます？」

「待つてました♪・・・おーいあつかしいっ！陽炎ちゃんたちきたよー」

工廠奥から明石が現れる。

「はーい準備バツチリですよ。皆さん艦装だしてこつちにならんで下さい。」

明石と夕張が機械を操作し陽炎たちの魚雷が元に戻されていく。

「ついでに次の試験兵装もつけちゃいましょうか！」

明石の提案で形状の特定すら難しいほど黒いマントが陽炎たちに取り付けられる。足まわりにもカナードのようなものが取り付けられる。

「これが夜戦用ステルス装備ですか・・・」

不知火がマントの黒さに驚きつつ呟く。

確かにこれなら夜に視認は難しい。夜戦を得意とする水雷屋の火がつく。

嫌がつていた秋雲ですら笑顔でマントをヒラヒラと動かす。

そこに2つの影が迫る。

「1つ、みんなに伝えることがあるわ。4人の補助に私ども1人神通に入つてもらう

わ。」

霧島に紹介され川内型軽巡洋艦2番艦「神通」その改二が前に1歩出る。

「皆さん、よろしくお願ひ致します。」

丁寧に頭を下げる神通、それに合わせて陽炎たちも頭を下げる。

そして再度向かい合うと

「やつた！ 神通さんと同じ部隊で出撃だ。」

「ご指導ご鞭撻よろしくお願ひします、神通さん」

「神通はんによかつたわあ」

と喜ぶ3人。

ただ1人、秋雲だけ複雑そうな表情を浮かべながら誤魔化そうとする。

それを見逃さない手練れの軽巡洋艦。

「私では何か不満ですか秋雲？」

「ひつ?! い・・・ いや全然ないです・・・ はい」

怪訝そうに秋雲を睨む神通。

その顔は完全に鬼教官のそれであり狼狽える秋雲をさらに追い込んでいった。

「ほどほどにね、神通。あくまで兵装試験が目的の部隊よ？」

「分かっています。でも弛んでる娘を見たらウズウズします・・・」

もう逃げ場はない。そう悟った秋雲はとなりで喜ぶ姉たちを困惑の目で見つめていた。

その頃、霧島と神通の改二艤装に夢中の明石と夕張だつたが会話を終えた2人が一瞬放つ殺気に思わず距離をあける。

「あまり・・・ジロジロ見ないで下さい・・・」

恥ずかしそうな声とは裏腹に神通の顔にはお仕置きしなきや！という言葉が書かれていた・・・

# 夜は危ないから灯りをつけましょう

夜1930

鎮守府近海に2つの艦隊が並ぶ。

そのさなかであつても陽炎たち4人の姿は夜闇に見え隠れしていた。

「あれかなり見えづらいっぽい」

「電探使えばなんとかなりそうだけどね」

実際陽炎たちが装備している夜戦用のマントは視認こそしづらくとも電探等レーダー関連には普通に反応してしまう。

早速その事をメモする五月雨。片腕につけた盾を器用に机代わりに使いササツと書き終える。

緩やかな曲面を持つ40センチ四方くらいの盾、それと艦装の機関部をつなぐケーブルが白露たちの試験している兵装。

盾表面に磁場を発生させ実体弾を誘導、受け流そうという兵装である。今のところの評価は「それなりに使える」であつた。実際に36センチ砲くらいまでなら問題なく受け流せる。ただ盾の当て方でその成功率が大きく変わったり、磁場の発生にかなりの工

ネルギーを消費したりと扱いにくい。

「受け流したのあたしに当てないでね？」

ゆっくりと航行しながら最後尾の北上が注意喚起する。

「多分・・・大丈夫だと思います！」

胸を張つて答える五月雨。

どこかゆるゝい空気感が漂う。

しばらくはお互に航行して巡り会つた瞬間から鬪いとなる。  
その瞬間は毎回唐突にくる。

ほんの一瞬、電探に反応があつた瞬間全員の表情が変わる。

敵にバレぬよう探照灯はお互いつけていない。が電探にはそれなりに離れてＴ字になるよう航行する相手艦隊。

緊張が走つた瞬間、相手艦隊の先頭をいく神通と恐らく最後尾の霧島が探照灯を照射。結構な距離があつても眩しさに一瞬反応してしまう白露たち。霧島が容赦なく砲撃する。とつさに盾を起動し防御の姿勢を整える。

「このまま霧島さんの間合い超えるよ！」

白露に続いて他4人が突撃。僅か後方で北上がその時を伺う。  
が北上が気づく。

「まっず・・・みんな電探使えないよ！」

盾を起動した結果、磁場の影響か電探に大きくノイズが走る。それでも探照灯を灯す神通と陽炎たち4人分の闇、その後方に霧島と相手艦隊の姿は捉えていた。

距離が近付き神通、霧島が探照灯を照らしつつ近接戦闘の用意を行う。まだ陽炎たちは撃つてきていなかった。

(こんなもんかな?)

1列になつていた白露たちの後方、北上が艦隊から飛び出し霧島に向け一気に加速する。

(ここからは重雷装巡洋艦の間合い!)

北上にとつてはいつも通りの勝ち方。

だが今日は少し違う。

魚雷を放つ直前、背後に気配を感じ振り返つた北上を闇から突如飛んできた無数のペイント弾が襲う。

「え? なにこれ・・・」

北上、轟沈判定。訳もわからぬまま立ち尽くす北上。

「もしかして電探封じてから陽炎たち別々に動いてた?」

闇を生かして艦隊を誤認させられた。自分の読み間違いにガツクリする北上。仕方なく白露たちを見学する事になつた。

いつもなら北上が魚雷を撃つタイミングだがその感じがない。おかしいと思った白露たちが列を崩す。

「夕立、五月雨は後方警戒、僕と姉さん、村雨はこのまま艦隊に突っ込むよ！」

時雨の指示に5人が動く。水柱を上げながら突撃する3人。そして後ろを振り返る2人。振り返った2人の目の前にそれぞれスパツツから伸びる白い足が飛んでくる。

「つん！」

「つい！」

顔面に膝蹴りを受け吹き飛ぶ2人、そこにペイント弾の追い討ちが容赦なく襲う。

夕立、五月雨轟沈判定・・・。

神通に時雨、霧島に白露、村雨で近接戦闘が行われる。

機動力と手数で有利な駆逐艦だが相手も相手。

神通、霧島は当鎮守府でもきつてのインファイター。流石に強い。

時雨が大きく跳ね盾で殴るように神通の顔を狙う。それを身をかがめ後方へ流す神通。それ待つていたように時雨が膝で神通の顎を狙う。しかしその攻撃は神通後方の闇から叩き込まれた陽炎の拳によつて止められる。姿勢を崩した時雨の鳩尾に容赦

なく神通の肘が刺さる。時雨は氣絶、一応は轟沈判定となる。

氣絶した時雨を神通が抱え陽炎へと微笑む。暗くてよく分からぬが多分陽炎も微笑み返しているだろう。

霧島側も秋雲、不知火、黒潮によりペイント弾まみれの白露、村雨が「えつ！何が起こつたの？」と混乱している。

6対6で行われたこの演習は0対6という圧倒的な結果で陽炎たちの勝利となつた。

# 赤城、食べます！

赤城改二の公開から1ヶ月程たつたある日の1130ごろ。

第4兵装試験鎮守府、その空母寮に赤城と瑞鶴の姿があつた。

「瑞鶴ちゃん？ 次の一射が当たつたら間宮食堂のプリン奢つてくれますか？」

「いいですよ！ そのかわり外したら私に奢つてもらいますから」

お互に挑戦的な視線を交える。そのまま赤城は目を閉じ深呼吸。

赤城の深呼吸が終わるとその目は真っ直ぐに小さな的を見据えていた。

弓矢の訓練。彼女たち弓矢型の発着艦システムを持つ空母において必須の訓練。午

前のプログラムが終わり昼時を迎える2人は昼食を午前最後の一射にかけていた。弓矢型空母の殆どは、いつもこうして食後のデザートなんかをかけては一喜一憂していた。

ゆっくりと弓矢を構え引き始める赤城。張り詰めた空氣。

（お願い・・・外してえ・・・今月ピンチだからあ・・・でも赤城さんならワンチャン・・・）

固唾を飲んで見守る瑞鶴は変な汗をかきゾワリとしていた。

それと同時に勝てる可能性も見出していた。

「グウウウウウウウウ・・・・」

張り詰めた空気を裂くように赤城の腹が鳴り「限界です・・・」と赤城が腰碎けなる。弓矢を置きその場に座り込む赤城。

笑顔の瑞鶴が駆け寄る。

「赤城さん！これは私の勝ち・・・でいいですか？」

「・・・・」

返事はない。赤城の肩を軽く揺らし確かめる。俯いたままの赤城。

「えつ？ 赤城さん？ 大丈夫ですか？ 赤城さーん？」

それでも俯いたまま呼吸以外なんの反応もない。

「お腹空き過ぎて気絶しちやつた？」

瑞鶴がどうしたものか考えながら腰を下ろす。

目の前に座った瑞鶴に突如赤城の両手が伸びる。

いきなり両肩を掴まれた瑞鶴が驚いたと同時に赤城の口が動く。

「瑞鶴ちやん・・・あなた確か七面鳥って呼ばれてましたよね・・・私、お肉とつても好

きですよ・・・・」

「えつ？ いやあの～赤城さん？ 正確には七面鳥って艦載機のことですか？」

「上半身は貧相ですけど・・・よく見れば美味しそうなお肉のついた下半身・・・・」

ジットリと瑞鶴の身体を見つめる赤城から黒いオーラが立ち込める。

とつさに距離を離そうとした瑞鶴だが全く動けない。

「誰が貪乳ですか！いや赤城さん、冗談ですよね？てか力強い！全然動けないんだけど！」

カシュンツ・・・

赤城の艦装から駆逐イ級のような機械が展開される。

これこそが第4兵装試験鎮守府の赤城がテストしていた近接兵装、「対近接用大型粉碎ブライヤー」。深海棲艦の口による近接攻撃を模して開発された大型艦向け兵装である。

両手で弓矢を操る空母の邪魔をしないよう赤城の口と連動して動作するそれは、もう1つの口と言えるモノであり消化等は出来ずとも食いちぎつたり噛み碎いたりは出来るのである。

怯える瑞鶴のスカートを少し捲り露わになつた太もも目掛けて歪な口が襲いかかる。

「ついい！痛い痛い痛い！ちよつと赤城さんストップ！」

全く力を緩めない赤城にかなり危機感を感じた瑞鶴が叫ぶ。

「ちよつ翔鶴姉え！痛い！助けてつ！翔鶴姉えつ！」

妹の悲痛な叫びを聞き休憩室にいた翔鶴と蒼龍が駆けつける。

「えっ！瑞鶴？赤城さん？どういうこと？」

「どつとりあえず赤城さんのコレなんとかして！」

翔鶴が赤城のそれを力いっぱい引き剥がす。

「つい・・・取れたあいつたいなあもう・・・」

「プツ！七面鳥の踊り食いつ！アハハハハハ！」

笑いながら蒼龍が瑞鶴の太ももを治療する。

幸い歯型がついて赤くなる程度で済んでいたが、念の為に医務室へ運ぶことにした。

赤城の方は翔鶴が持っていた休憩室のお菓子を食べ落ち着いたのか艦装をしまい自責の念と戦っていた。

「私は・・・一体なにを・・・瑞・・・鶴ちゃん・・・そうだお昼・・・瑞鶴ちゃんが美味しそうに見えて・・・」

立とうとする赤城だが足元が覚束ない。ヨロヨロする赤城を翔鶴が支える。

「赤城さん、私にか食べ物持つてきますから少し休んでいて下さい。」

そう言つて休憩室に赤城を担ぎ込み寝かせた翔鶴が食堂へ向かい数分後・・・

ある程度空腹を満たした赤城は医務室のベッドに腰かけながら太ももを冷やす瑞鶴に深々と謝罪していた。

「ごめんなさい・・・まさかこんなになるなんて・・・本当にごめんなさい・・・」

どうやら赤城自身も意識が朦朧としていたらしくかなり混乱していたようだ。詳しく述べは翔鶴から聞いたらしい。

「いいつていいつて！ 翔鶴型頑丈だから！ 駆逐とかだとマズかつたけど……ほら顔上げてください！」

「ありがとう……瑞鶴ちゃん……」

うつすら涙を浮かべる赤城を瑞鶴が撫でる。

「一緒にプリン食べましょう？ 赤城さんの奢りで！」

「つ！ええ……食べにいきましようか」

足を冷やす瑞鶴をおぶった赤城は食堂に向かい医務室を後にした……

# 執務室と工廠は戦場

0900

食堂での朝礼を終え執務室に戻った提督を迎えたのは爽やかに目覚めた大淀。「次は提督か陸奥さんのどちらか仮眠どうぞ！」

「じゃあ提督、いってらっしゃい。」

「あつ・・・助かります・・・」

思わず敬語が出た提督がフラフランと執務室横の仮眠室へと向かう。

「んーーー！ 提督起きてくるまでもう一踏ん張り頑張りましょうか。」

「無理はなさらずに。陸奥さんは夕刻に出撃控えてますから。」

スケジュールを見ながら各々仕事へ取り掛かる。

神通と陽炎の異様に熱の籠もつた夜戦装備への文章を見ながら要点を纏める陸奥。

仕上がった資料を大本営に送りつつ依頼の受託を行う大淀。

「そろそろ演習組からの映像上がってくるわね。」

「ばっちりこつちらで保存しておきますね。」

提督と陸奥もそうだが大淀と陸奥もなかなかの連携を見せる。

それでも減らない仕事たち。

執務室は今日も静かな戦場となっていた。

そんな時、工廠では明石が那智改二の電探感度の調整を行つていた。

「那智さん！こんなでどうですか？」

「うーん……感度が高すぎるのかノイズが走るな……」

「これ以上下げるか実戦で機能するか怪しくなりますよ？」  
昨日まではこんなじやなかつたんだが……と首を傾げる那智には思い当たる節なんて無かつた。

明石にしてみても電探は提督の方が弄れるのでここまでくると提督待ちにならざる負えなかつた。

「那智さん、提督待つて直してもらいましょうか……」

「うーん……出撃までに間に合うといいが……」

那智の出撃は1300。それまでに直らなければ出撃において那智自身のリスクが高くなることと出撃してもデータがあまり参考にならないという問題があつた。

（夕張に聞いたら「えつ？那智さん感度3000倍？」とか意味分からぬこと言い始めましたし……提督寝てるみたいだしとりあえず陸奥さんに連絡してみますか……）

「あつ陸奥さん、明石です。」

「はいはい、どうしたの？」

「今那智さんの電探感度の調整してたんですけどノイズがひどいらしくって提督に見てもらいたくって・・・」

「今提督仮眠とつてから起きたら向かわせるわね。」

「ありがとうございます。じやよろしくです。」

「那智さん、とりあえず提督起きたらこっち来ててくれるみたいですね。」

「ふむ、わかつた。ならそれまで待つとしよう。」

「あつそれなら那智さんの改二艤装、ちよおおおつと見てもいいですか！」

「構わないが・・・変なことするなよ？」

「ええそれはもう！勿論です！」

興奮した明石が那智に怒られるまであと17分・・・

# 演習はデータ取りに最適ですね

1週間後、

第4兵装試験鎮守府近海に見える12の影。

天龍型1番艦「天龍改二」と曉、響、雷、電からなる普通な水雷戦隊+金剛型3番艦「榛名」の編成が第18近海護衛鎮守府の艦隊。

高練度な攻撃艦隊。連携も完璧にこなす当鎮守府最強の艦隊である。

ただ天龍たちは完全に相手の編成の訳が分からなくなっていた。それは彼女たちの報告を受ける提督も同じ。

「ねえ・・・あの金属の塊ってなに?」

暁が誰となく問いかける。

「よく見ると上んどこから扶桑型の艦橋みたいなのが出てるし位置的に山城じやねーか?」

隻眼を凝らして天龍が答える。

鉄板のようなモノに囲まれている艦娘?を先頭に見たことのない手甲のようなものをつけた時雨と夕立、近接メインとなる短い戦闘距離でありながら空母の赤城と瑞鶴、

最後尾には天龍が並ぶ。

「提督、榛名が主砲で牽制して天龍さん達が突撃でいいですか？」

「ええ構いません。敵艦載機発艦までに一気に距離を詰めましょう。インファイトに弱い空母を優先して撃沈、あの塊は・・・後にしましょう。暁と響には時雨と夕立をお願いします。」

「了解！じゃいくぞお前ら！」

「うん！」

「phonymane」

「響、作戦中は日本語でね？」

「了解なのです。」

「はい！榛名にお任せを！」

演習開始を知らせる空砲が鳴る。

と同時に金属の塊に火が点く。

「おいつアレ爆発すんじやねーか！」

「とりあえず皆さんは突撃を！榛名、砲撃開始しまs電探に反応？艦載機？早すぎます

！」

想定外のタイミングで発艦された敵艦載機に対空砲火をしつつ天龍たちは進む。

「・・・多分カタパルトかエレベーター・・・皆さん瑞鶴です。瑞鶴を優先して狙つて。提督の指示に榛名が動く。異様に早い発艦は我々の知らない装備によるものと考え瑞鶴を狙う。

「赤城が撃つてこない・・・」

響が気付く。

「おっしゃ！ならチャンスじやねーか！」

空母達に狙いを定めて加速しようとした天龍。その視界には異常な速さで真っ直ぐに突つ込んでくる金属の塊が写る。

とつさに天龍たちが砲撃する。だが弾をものともしないソレが零距離まで一気に飛び込んでくる。刹那、背後のブースターと装甲全てをページ、中から伸びた色白い手が雷と電を掴み水面に叩きつける。

あまりのことに対応が遅れる天龍たち。

「こんなバカみたいな装備・・・不幸だわ・・・」

巨大な砲塔が火を吹く。

一瞬でペイント弾まみれになり轟沈判定となる雷と電。

次の動きをしない無防備な背中に容赦なく魚雷を放つ響。

「どうせもう弾入つてないのよね・・・フフフフ・・・」

虚空に笑う山城に撃沈判定が出る。

それを無視して4人は相手の懷へと飛び込む。

前に出てくる時雨、夕立に砲撃する天龍と暁。その弾は時雨たちの手甲に阻まれる。というより受け流されている。

「嘘でしょ！弾が誘導されてる！」

「なら直接ぶつた切ってやるよ！」

天龍が抜刀、足の止まつた夕立へ一閃するがそれを相手の天龍が受け止める。

「改二じやねークセによお」

「うるせえぶつ潰してやるよ！」

天龍2人が斬り合っている間に隙を見て響と榛名が空母連中に襲い掛かる。

「私、近接だめだから！」

そう言いながら下がる瑞鶴。構えをとつて砲撃から近接の間合いに入る響、榛名。そこに立ちふさがったのは瑞鶴と同じく空母であり近接を苦手とする赤城であつた。赤城に拘みかかる榛名。

「響さん、瑞鶴さん任せました！」

「わかった・・・」

短く返答した響が瑞鶴へ向かうのを見ながら榛名が赤城を拘束。

がつちりと赤城の両肩を掴み主砲を向ける。

「榛名の勝ちです！」

その瞬間、赤城の艦装から伸びた駆逐イ級のような形をした4つの機械が榛名の砲塔に噛みつく。

「これは?!」

「榛名さん、すみません。今日の私、艦載機のかわりにこの子たちなんです。」

榛名の砲塔が金属の悲鳴を上げながら噛み潰されていく。

「いやつなんでつなんなんですかコレエ！」

戦闘力を奪われた榛名に続行不能の判定が出る。

時雨たちの強固な防御に苦戦しつつ魚雷は防げないことと攻撃力が低いことを見抜いた暁は2対1でありながらも有利に立ち回る。

弾で牽制し魚雷を放つ。これを繰り返してなんとか時雨を小破させていた。だが敵に夢中になるあまり1つ失念していた。

大きく突撃してきた夕立をいなし夕立が体勢を崩した隙に魚雷を放とうとする。そこで暁は魚雷が尽きていることを知る。

「うわっ弾がもう……」

時雨と夕立はこれ待っていた。

暁は知らなかつたが彼女たちは一方的な狩りが好きなのである。

今まで撃たなかつた主砲や魚雷を一斉に撃ち始める2人。

「山城の仇だよ……暁！」

時雨の魚雷を受けた暁は轟沈判定。悔し涙を流していた。

天龍同士の斬り合いはやはり改二の方が強い。

「オラオラっ！足が止まつてつぞ！」

「このヤロー、調子のりやがつてえ」

僅かではあるが確実に天龍改二が押していく。

何度目かわからない鍔迫り合い。だがこれが最後の鍔迫り合いとなつた。

・・・ピシッ・・・

天龍改二の刀にヒビが入る。

「んな?!」

長年の相棒の突然の悲鳴に戸惑う天龍。

あれよあれよという間にヒビは広がり中程から刀がパキッと折れてしまう。

折れた刀と相手の折れてない刀を交互に見る。

「わりいな天龍改二さん？ オレのこいつ、お前のとちょ一つと作りが違うんだわ。」

外見は殆ど一緒だが第4兵装試験鎮守府の天龍に与えられたら刀は従来品を改良し

た更新版。耐久性アップをメインに素材の変更と刀身断面が変更されたそれであつた。

「まだオレらんとここまで回つてねえヤツじゃねーかよ・・・」

ショックを隠しきれない天龍改二を時雨と夕立が襲う。

呆気なく撃沈判定が出てしまう。

そのまま1人になつた響を瑞鶴以外の全員で挟撃、撃沈とした。

これにより本日の演習は第4兵装試験鎮守府の勝利できつちり夜戦前に終了となつた。

# 龍田さんブチ切れ案件

1150

秋雲の部屋のドアを叩くものが現れた。

昨日、ようやく完成した新刊「潜水艦がちょっと鬼門だわ／＼／＼」を数冊配布してきたばかりであった。

(もう誰か感想言いにきたかな? 今回の結構自信あるんだよねえ . . . )

秋雲がノホホンと扉を開ける。

客人を見上げ言葉を失う。

一瞬固まる空気。

彼女は自分の無警戒さを後悔した。

そこに立つのは満面の笑みを浮かべている龍田。

(いやまだ配布してから早い . . . 龍田さんには見られてないはず . . . )

「あのー龍田さん? どうしました?」

少し目を逸らしながら秋雲が問う。

「明日の偵察部隊の打ち合わせ場所、まだ伝えてなかつたからね。第2会議室に09

30に集合よ。」

秋雲は安堵した。返事と感謝を伝え扉を閉める。が閉まらない。龍田の足が見事に扉を止めていた。

「龍田さん？ 足が邪魔で閉めらんないですよ？」

恐る恐る龍田の顔を見上げる。

その顔に笑みなるものは何もなく、まるで秋雲を侮蔑するかのように見下していた。

「秋雲ちゃん？ これ何かしら？」

龍田が差し出したもの。それは秋雲の新刊。

「それは・・・龍田さんと潜水艦たちの日常をおもしろおかしく描いた同人誌で・・・お読みになりました？」

「しつかり読んだよ。秋雲ちゃんってどうっても絵が上手いのね。」

しゃべり方は変わらないのに一切表情が変わらない龍田に恐怖しつつも秋雲は内容を思い返す。

龍田が潜水艦にトラウマがあることを元ネタにした日常ギャグもの。テーマ自体は問題ない。現に龍田も許可をくれていた。

なら何がダメだったのか・・・秋雲は考える。深く深く考える。

そして結論に至る。

今回の同人誌中に出でくる龍田だが秋雲設定で「潜水艦に会うとショックでアヘ顔を晒してしまう」のである。

（ああマズい・・・ついアヘ顔気合い入れて描いたからめつちや下品な感じに仕上がったじゃん・・・）

この時点では逃げ道の模索に脳を切り替える。

「秋雲ちゃん？どうしたの？キヨロキヨロして。もしかして私からどうやつて逃げようか考へてる？でもね？・・・逃がさないから・・・」

冷や汗ダラダラの秋雲を追い詰めるように龍田が扉を引っ張る。

駆逐艦 vs 軽巡洋艦、ましてや相手はブチ切れ龍田。敵うはずもなく徐々に負け始める。

その時秋雲に名案が舞い降りる。

秋雲は押さえていた扉をパッと離す。突然力の抜けた扉に思わず姿勢を崩す龍田。その隙に秋雲は脱出。後も振り返らず全速力で逃走を図つた。

振り返らなくたつて分かる。追つてきている。

秋雲は逃げ込むに最適な場所を考える。

怒っている龍田を抑え込める人物・・・提督・・・陸奥・・・天龍・・・霧島・・・青

葉・・・

この中で今回の事情を把握している人物・・・提督か青葉  
信頼にたるのは・・・提督！

目指すは執務室。秋雲はただがむしやらに足を動かした。

しばらくして執務室には提督と龍田、大淀の3人がいた。  
大淀は書類に夢中。龍田は提督相手に問い合わせていた。

「提督♪秋雲ちゃんしらない？ここに逃げ込んだはずだけど・・・」

「秋雲？秋雲なら部屋に籠もつて創作活動してるだろ？」

「その部屋から逃げてここにきてるはずよ？」

「いや、しらないなあ」

「とぼけちゃつて・・・そุด♪提督、秋雲ちゃんの居場所教えてくれたらパフパフして  
あげる「そこの戸棚の裏です！」ありがど♪」

呆気なく龍田の策略にハマった提督により秋雲の居場所が割り出される。  
必死の弁明も為すすべなく龍田のゲンコツ3発を受け秋雲は気絶した。

# 朝

島風が5周目に入ろうとする時……空母寮では弓道場の清掃が行われていた。

「五航戦、床は任せました。」

「雑巾がけくらいみんなでやりましょうよ?」

加賀と瑞鶴が火花を散らしてにらみ合う。

「またやつてますね。あの2人。」

「ほんと仲良しバカツプルですよね。」

赤城と蒼龍が微笑ましそうに見つめる。

加賀と瑞鶴が言い争うのはいつものことなのだ。

他鎮守府からの転属組で練度の高い加賀と建造されたばかりの瑞鶴。2人は師弟関係であり同時に恋人とも言える仲である。

今は「五航戦」と瑞鶴とその姉翔鶴を一括りで呼んだが瑞鶴と2人の時は「あなた」と

呼んでいたりする。

「床の雑巾がけは弟子の仕事ではないかしら?」

「いや、こんな広いんだからみんなでササッと終わらせましょうよ! ほら蒼龍もやりた

「そうに見てますよ！」

「うわつ夫婦喧嘩に巻き込まれた！」

「：／＼／＼

「加賀さんどうしてそこでほつぺ赤くするんですか！蒼龍も変なこと言わない！ああ翔鶴ねえ助けてっ・・・」

妹の叫びも虚しく翔鶴は黙々と窓を拭いていく。

「朝から賑やかやね！」

「たっくさあ二日酔いのアタマにガンガンくるつてーの」

「毎日毎日よく飽きないわよね。」

廊下掃除を終えた龍驤、隼鷹、飛鷹の軽空母3人が入ってくる。

「これで結局全員で雑巾がけ！までがいつもの私達ですからね。」

雑巾を絞りながら赤城がみんなを見渡す。

「赤城さんが言うならやむを得ません。五航戦、やりますよ。」

「ハナからそうしてればいいんですよー」

結局この場にいた正規空母全員で雑巾がけを終え朝礼へと備える空母寮であった。

島風の周回数が20を数えようとするころ。

提督私室に目覚ましのアラームがなり響く。

寝ぼけ眼のままアラームを止める提督。

そのまま横を向き隣人を起こす。

他の艦娘には絶対見せない寝間着姿の陸奥が一発伸びをキメる。

「ん——・・・もう朝なのね・・・」

「もう日が昇つてる・・・」

つい4時間ほど前まで執務に明け暮れていた2人にはこの現実は残酷だつた。ベッドに腰掛けていた提督が陸奥の手をとり起こしてあげる。すつぶんで寝癖がついた陸奥を見るのは提督の特権である。お互い寝ぼけたまま朝礼に向けて支度を始める。

「あつ提督、力チユーシヤ取つてー」

「ほれほれ。」

「ありがとつ」

普段カリカリと執務をこなす2人からは考えにくいほど間延びした空気が流れれる。慣れた手つきで化粧を整える陸奥に支度を終えた提督がコーヒーや差し出す。それを飲み終えるころにはいつもの提督と陸奥へ完全に変化していた。

# 幸運は降つてくる

10分程前・・・

「このマップ・・・ここ」の海域に降ろして下さい。」

上空を飛ぶ輸送機の中でパイロットに一人の少女が話かける。  
「よろしいのですか？かなり鎮守府へは遠回りになりますが・・・このまま鎮守府へお送  
りしますよ？」

「それが申し訳ないんですがこの辺で待ち合わせしてゐるんです。」

「本機は水上機ではありませんから着水できませんよ？」

「構いません。この高度から降ろして頂ければ助かります！」

「この高度から?!確かに備え付けのパラシュートはありますが・・・」

「パラシュートは必要ないです。」

そう言うと少女は両足にとりつけた装置を自慢気に見せる。

「司令から貰つた逆噴射装置です！万が一のために持たせてくれました！」

「いくら艦娘と言えどそれだけでこの高度から降下は無茶ですよ！パラシュートをご使  
用ください！」

「パラシユートなんて開いたら狙われちゃいます！それに大丈夫って確信あるんです！」

「・・・かしこまりました。あなたのご無事をお祈りいたします。」

そういうと何かを察したパイロットは輸送機を彼女が言う目標地点へと向かわせた。数分後、降下用意を済ませマントを羽織った彼女へそろそろ着く事を伝える。

「こんなどこまでありがとうございました！ないすふらいとつ！でした！」

安全な近海とは言え海の上空を飛んでくれたパイロットにお礼を言うと彼女は開いたハツチからためらいなく飛び降りた。

その頃、海上では・・・

「輸送機から熱源の降下を確認・・・輸送機は離脱・・・間違いないわね・・・」

「サイン無かつたら3人だからね。」

「んぐ・・・おっ！照明弾撃つたみたいやで・・・1発や！」

「ということは陽炎を指名みたいね」

「ああ～私かあ～緊張してきました」

不知火と黒潮は若干陽炎から距離を取る。

これから行われるイベントを見物客として見れるとなれば緊張も和らぐ。陽炎は主砲を構え目標を待つ。

上空からマントをひらめかせて落ちてくる少女。それが射程圏内に入る瞬間に発砲。だが対象が速すぎて上手く当たらない。

(仕方ない・・・着水狙うか・・・)

あの速度なのだから着水は隙だらけになる。もしかしたら着水に失敗するかもしれない。どつちに転んでも勝機があると踏んだ陽炎は相手の着水に合わせる。

着水の瞬間、足の逆噴射装置を起動。盛大に水しぶきが上がり陽炎の狙いを妨げる。本来なら着水なんてできない速度での着水。普通なら身体がへし折れている。だが水しぶきの中から少女が主砲を構えて飛び出してくる。

あの子なら着水は問題ない・・・と見物客2人は考える。なぜなら彼女には相当に高い実力と幸運の女神の唇を奪いにいくほどの強運が付いているのだから。

陽炎の砲撃を縫いながら不規則なジグザグを描くマント。

お互いが零距離まで接近したとき、お互いの主砲がお互いの眉間に捉える。硬直する2人。ややあって陽炎が口を開く。

「この1ヶ月でまた強くなつたね。お帰りなさい、雪風！」

「姉さんお久しぶりです！雪風、ただいま戻りました！」

1ヶ月ぶりの姉妹感動の再会。被つていたマントを脱ぎ幼さの残る少女が顔を覗かせる。

あどけない表情をした陽炎型8番艦がそこにいた。

## 呑み処「鳳翔」

川内達の艦隊が偵察に出て30分ほど

執務室では今日分の執務が終わりを告げようとしていた。

「ん～～…ふう…提督、私の方は終了したわ。」

「おうお疲れさん、今日分はここまでだからのんびりしててくれ。大淀も終わり次第  
ゆっくりしてくれ。」

「かしこまりました提督！」

陸奥、大淀の順で仕事を上げていく。

「提督？ お仕事終わつたら1杯付き合わない？」

珍しく陸奥が提督を晩酌に誘う。

提督はあまり酒に強くないため少し考える。

「珍しいな…なんかあつたのか？」

「それがね、隼鷹は遠征だし那智は明日早いからつて寝ちゃつたし1人なのよね…・・・

寂しげな表情を浮かべる陸奥。

「ああ分かつた。なら仕事終わり次第付き合うよ」

「じゃあ待つてるわね。あつ大淀はくる？」

「私はお酒は遠慮しておきます……すみません。」

「いいのいいの！気にしないでね！」

10分ほど経ち提督も執務を終わらせた。

上着を羽織り、座っている陸奥の手を取る。

「それじや向かいますか！」

「ついでお夕飯も食べちゃいましょうか？ね！」

2人は夜の街……ではなく間宮食堂の一角、呑み処「鳳翔」へと足を運んだ。

「はああ～このキンメ、自分で食べたいですねえ……」

料理を仕込みながら鳳翔は食欲と戦っていた。

今日は近くの漁港からキンメダイを頂いたのでみりん焼きにしてお店の日替わり定食として出している。

あと2匹分のキンメダイを見つめながら余れば自分の口に入るため期待して閉店を待つていた。

今のところ、今日は鳥の唐揚げと焼おにぎりが多く出ているためこのまま行けばキンメダイは鳳翔の胃袋に収まるだろう。

そんな事を考えているとお店の扉が開く。

「鳳翔、お疲れ様ー。2人空いてる?」

来客に驚くこともなく対応する鳳翔。

「あら提督に陸奥さん、カウンターでもお座敷でもどうぞ!」

2人はカウンターに腰掛ける。

「あら、今日の日替わりキンメダイなの!じやあ私これにするわ!」

目が輝く陸奥。「それと熱燗2つ」とお酒も忘れず頼む。

「じゃあ俺は・・・」

固唾を飲んで見守る鳳翔。キンメダイはあと1つ・・・注文があれば断れない。

「唐揚げ定食とお味噌汁、それと梅酒のソーダ割りで」

安堵とともに全身の力が抜ける。

「承りました。少々お待ち下さい。」

小さくガツツポーズしながら厨房で調理を始める。

カウンターでは2人が会話を続ける。

「提督つてお魚苦手よね。キンメ美味しいから食べてみる?」

「いや・・・匂いでNGだわ・・・やっぱトリカラ大正義だよ!」

「そのくせ鮭は大好きよね。」

「そりや鮭は白飯の大親友だぞ！そんなことよりいきなり熱燗2つもいくの？」

「慣らすには丁度いいでしょ♪ 提督こそソーダ割りだと呑み易いから呑みすぎて酔い方するわよ♪」

「そもそもそんな呑まないから大丈夫だよ。」

久々の2人で晩酌。部屋でもそうだがついつい会話が盛り上がる。

そんなうちに焼き魚の香ばしい香りが漂う。

「うつ・・・この匂い苦手だなあ」

「そう？ 私は今にもお腹が鳴りそうよ」

2人の会話は好きな魚から徐々に好きな料理へと変わり最終的には空母ヲ級の杖についてへと変わつていった。

そんな話しているうちに料理が出来上がる。

「お待たせしました。こっちが陸奥さんの分でこっちが提督の分。ごゆっくりお召し上がり下さい♪」

漂う香りが空腹を刺激する。鳳翔に礼を告げた2人は徳利とグラスを合わせると目の前の定食を貪つた。

鮮烈に赤い焼き魚をおかずにご飯とお酒を楽しむ陸奥。

唐揚げを白飯に乗せ搔き込む提督。

しばらくして空腹が満たされた2人は酒をチビチビ呑みながら取り留めもない会話を続ける。

「ああああアツタマいつてええ・・・」

赤い顔の2人はそろそろおないとまと席を立つ。

「ほんと提督つてお酒だめねえフフツ・・・」

アタマを抑える提督と上機嫌な陸奥はお支払いを終え提督自室へと帰つていった。

# それぞれと

「うわあああああっ！」

叫びと共に上体をピシッと起こした山城。

そこはドツクではなくベッド。

「夢え？ うう目覚め最悪よ……うつ寒つ……不幸だわ……」

下着姿の自分を確認して腰の痛みを感じながら状況を整理する。

さつきまでの光景が夢であつたことに確証を得た山城は溜め息を吐きながら腰をする。

「いつたたた……うう湿布も剥げてるし……」

腰痛だけは現実。というより腰が痛かつたからあんな夢を見たのだろうとまた溜め息を吐く。

たしかに山城は多重装甲の試験を担つていて、腰痛の原因はそれだけではない。

そのもう1つの原因。隣で心地良さそうに寝ている下着姿の少女を見つめる。

「あああ、このマセガキめ……」

呟きながら軽く少女のほっぺをなでる。

「ん～やましろお・・・」

寝言でも山城の名前を呼ぶ。その幸せそうな顔にイラツときた山城。少女の額にそれなりに力を込めデコピンする。

「起きなさい！」

パーンツ！ という音と共に少女の目がパチツと開く。

「ひえ？ ふえ？ えつ？ や・・・ 山城？ えつ？」

「今日は1回で起きたわね、時雨。」

「ああおはよう山城、いい朝だね・・・」

おでこをさすりながらゆっくり起き上がる時雨。

「次起こす時はできればもつと優しくがいいかなあ・・・」

「贅沢言うな。毎晩毎晩あんな時間までえ・・・あんたのせいでこつちは腰痛持ちなのよ

！」

そう言いながら着替える山城。

昨晩のことを思い出しながら「ごめんごめん」と時雨も着替え始める。

「つたく・・・早く明石か提督に見てもらわないとね・・・」

支度を終えた山城が部屋の玄関でゆっくりと座りながら靴を履き時雨を待つ。するとインターホンが鳴る。

「山城……起きてる?」

「はーい……って姉様! 今開けますね!」

姉の登場に喜ぶ妹。喜びの余りサツと立ち上がる。  
腰に走る電流。崩れるように座り込む。

「あああああ・・・」

「山城、大丈夫かい?」

「大丈夫なわけないでしょ・・・」

時雨が山城の代わりにドアを開ける。

そこには山城の姉、扶桑と駆逐艦「満潮」が立っていた。

「おはよう2人とも・・・山城? 大丈夫?」

「うう姉様ありがとうございます・・・」

「山城の腰痛めるとかアンタどんだけよ・・・」

「いやあなんでだろうね。」

扶桑の手を借りて立ち上がった山城に時雨が肩を貸す。

扶桑満潮ペアを先頭に食堂へ向かう一同。

ふと山城は満潮の首についた赤い跡に気付く。

(姉様の口紅・・・)

時雨も気付いたようで山城に微笑みかける。

「向こうもおんなじだね♪」

「いいからあんたもつと背高くなりなさいよ。ちょっと低いわ。」  
時雨側に傾きながら歩く山城に「今すぐは無理かなあ」と遠くを見つめる時雨。  
食堂までの幸せな道のりをなんだかんだ堪能している2人であつた。

# 金剛型爆進！

演習より1週間程前・・・

「うちに演習？・また知り合いか？」

大淀から渡された演習依頼に目を通す。

そこに書かれた相手鎮守府の名前、「第7領海警備艦隊」の文字。

「知り合い？」

覗き込んだ陸奥の間に考え込む提督。その顔はまつたく心当たりがないようであつた。

大淀が第7領海警備艦隊の詳細を伝える。

「1年ほど前に設立されたところですね。たしか大本営属だつた提督が就任していますね。練度的に近い金剛型がいる鎮守府へ依頼したかつたようです。金剛型十駆逐艦2人での6対6を希望されています。引き受けます？」

「んく・・・引き受けよう。陸奥、金剛型4人を工廠へ呼んでくれ。駆逐艦は俺の方で選定する。大淀は相手方に連絡を。」

「はいはい」

「かしこまりました」

こうして金剛型の兵装変更と駆逐艦を2人、不知火と雪風の陽炎型を選んだ第4兵装試験鎮守府は演習の日を迎えた・・・

――――――――――――――――――――

今回、第4側の霧島は艦砲を持つておらず艦装から伸びたアームは前面のシールドと両腕へと繋がりパワードスースのようになつていた。艦砲を積まない分の重さをシールドの装甲厚に回せるため堅牢なソレに砲撃が有効でないと判断した相手霧島も殴り合いを選んだ。

そしてそれを中心に金剛型3人と駆逐艦が撃ち合う形となつた。

第7側は王道の砲雷撃戦を開戦、相手の出方を伺いつつ慎重に攻め込んでいた。対する第4側は試験兵装てんこ盛り。艦砲のない殴り合い特化霧島を筆頭に大きく炸裂する弾頭を用いた足止め特化の比叡、機動力に支障が出るほどの重装備金剛、想定よりかなり高速で動く榛名、そして海上迷彩のマントを纏つた駆逐艦2人。

「Oh! 弾がキレちゃつたネー」

両腕の大口径単装砲を投げ捨て艦装のハンガーにぶら下がる30・5cm6連装機関砲を手にする。

その武器切り換えのタイミングを逃さず金剛の死角に回る比叡。

「隙だらけよ！第4のお姉様！」

比叡の主砲が放たれる。爆音と共に金剛目掛け弾が襲いかかる。すかさず金剛は取れる武器全てを比叡に向けて投げ盾のようにして下がる。爆発と黒煙を搔き分け比叡が追撃に入る。が黒煙から飛び出した小さな身体が比叡に組み付き自由を奪う。

「くつ・・・雪風えつ！」

「残念ですが・・・比叡さんはここで脱落です！」

比叡がハツとした瞬間、容赦なく首に手をかける雪風。

・・・ゴキツ・・・

しちやいけない音がしたがそこは雪風。気絶にとどめる絶妙な力加減を見せる。

「O k !! N i c e L u c k y G i r l . . . 次は向こうのワタ s ゴフエツ!!」

ほぼ丸腰の金剛に第7金剛の砲撃が刺さる。

お互いに金剛型1人を失い均衡が崩れる。

積極的に動いたのはお互いの榛名と駆逐艦。

第7は榛名をメインに駆逐艦2人、吹雪と睦月で3 v s 1を作つて確実に仕留める作戦へ。手始めに比叡へと狙いを絞る。第4榛名が霧島へ意識を飛ばした瞬間を狙つて比叡へ向けて突撃、反撃する姿勢を作らせずに懷へと飛び込む。

駆逐艦2人の雷撃をなんとか避けた比叡に榛名の砲口が向けられる。

「あの雷撃、避けない方が良かつたかもしませんよ？」

一斉射を浴びた比叡は大破。榛名は駆逐艦2人に指示をだそと向き直ろうとしつさに回避行動を取る。

そこには大破して倒れる駆逐艦と相手方の榛名と雪風がいた。

牽制の砲撃を容易く避ける2人に勝ち目を見いだせない榛名は金剛の元へ移動し支援を求める。

「相手の榛名の動き・・・あきらかに普通より速いです・・・」

第7榛名が一瞬考えを巡らせた瞬間、第4榛名は異常な速度で間合いを詰める。

「つ！」

僅かに遅れた第7榛名へ第4榛名の速度に任せた頭突きが入る。

盛大な痛みと共に視界が揺らぐ。がお互いほぼ零距離、ここなら外さない。

爆音と共に痛み分けで大破した榛名2人。残るは、第7に金剛と霧島、第4に不知火と雪風、霧島。

砲撃が減り殴り合いがより激しくなる霧島たちを尻目に金剛へ襲いかかる駆逐艦2人。

機動力と小回りで金剛を攪乱するが戦艦の装甲を前に魚雷を持ってきていない雪風

では火力不足。不知火も残魚雷数が1発という状況。ジリ貧で動き回る駆逐艦2人は体力と燃料の限界が近づいていた。

「ねえさん！雪風がなんとか金剛さんの体勢を崩します。その隙に魚雷で頭部を！」

「チャンスは一度・・・頼りにしています、雪風！」

飛び込んできた不知火に金剛が砲撃を撃つ。

「くつ！ちよこまか動いてええ！」

不知火の背後から飛び出た雪風が金剛に足をかける。

鮮やかな足技で金剛の姿勢を崩すもガツチリと金剛にアイアンクローラーをされもがく。

倒れ込みもつれる2人へ不知火が魚雷を放つ。

金剛の頭頂部に直撃した魚雷で大破の判定ができる。

「ふう・・・雪風ありがとうございました。」

「えへへ・・・雪風もさつきの魚雷で大破貰っちゃいました・・・」

「不知火も燃料切れでもう動けません・・・」

海上に座り込む2人。その視線の先には楽しそう殴り合う霧島2人の姿があつた。

# 大淀データ管理帳

第4兵装試験鎮守府 現段階での試験中兵装一覧

## 駆逐艦

- ・吹雪、白雪、初雪、深雪

- ・12cm砲（第7次改裝品）

駆逐艦主砲（12cm砲）での対空強化を行うため、発射機構改善と迎角、射程の拡大を行つたもの。使用感良好とのこと。

- ・白露、時雨、村雨、夕立、五月雨、涼風

- ・対弾誘導磁場発生装置

ドイツとの共同開発で完成した防御兵装。磁場を発生させ弾を誘導、直撃を避ける。使用時に電探等電子機器への障害発生を確認したが防御力は高く戦艦主砲も対応。駆逐艦サイズ以上の艦娘への転用へ期待。

- ・陽炎、不知火、黒潮、秋雲

・夜間迷彩ならびに白波対策形状艦首

ベンタブロックを用いて夜間での目視をほぼ無効化するマント状の兵装。波さえ立たなければ目視はほぼ不可能だが熱を集めてしまってので熱源探知に反応してしまった。波への対策は艦首形状を変え白波を最小限とし対応。

・島風

・島風型向け機関（高負荷時出力優先仕様）

内燃機関の燃料マッピング変更や高圧縮化を行い、より高負荷時の最大出力を求めた仕様。低負荷時は従来型に大きく劣るが最大出力に向けてドカンとパワーが盛り上がりため扱い辛いとのこと。ただし島風の艦形を変えずに約2ノットの速力上昇を確認。

※綾波型の試験兵装は現地改修品が殆どのため省く

軽巡洋艦

・天龍

・新規格実体剣

天龍純正の実体剣の耐久性向上を目的に断面の変更等を行つたもの。現在、これから生産を行う天龍から隨時こちらの仕様へと変更。

・大淀

・試しに前髪切つたんです！気付いてください！感想ください！

重巡洋艦

・那智

・高感度広範囲対空電探

従来型と比較しより高感度広範囲を索敵可能とした電探。

那智にて試験）

期待通りの性能を発揮したが他艦娘へ応用可能かは要検討。

戦艦

・金剛

・手持ち火器携行ハンガーユニット 通称「鉄狼」

金剛型艦装の砲塔2つと交換することで運用可能なハンガーユニット。戦艦向けの手持ち火器（下記参照）を片側4つずつ携行可能。かなり重いとのこと。通称となる鉄

狼は金剛が付けた愛称をそのまま使用。

(現在の装備火器)

対空6連機関砲×2

31cm長砲身ライフル砲×2

2連誘導弾発射装置×2

近距離向け拡散榴弾砲×2

・比叡

・広範囲拡散型榴弾（41cm砲用）

主に足止めを行うための戦艦主砲向け弾頭。着弾と共に超高温を発生させ敵機関へのダメージを狙う。直接の攻撃力は低く寒冷地ではほぼ無力となる。これを試験するため金剛型で比叡のみ41cm砲へ変更。

・榛名

・金剛型向け軽量装甲ならびに更新型機関

金剛型改二付属のシールドへ防御を依存しそれ以外を徹底的に軽量化することで機関出力を上げずに機動力を上げる装甲一式。それだけでも機動力は上がったが榛名は

満足できず、次期生産型の機関（フリクション低減品）を使用しさらに機動力を向上。

- ・霧島

- ・戦艦向け関節補助艤装

艦娘の格闘能力を上げるために機関から直接出力を得て運用されるパワードスースのような艤装。

パワーだけでなく運動能力も上がるため格闘戦は強くなるが装備の都合で主砲を外すため射撃能力が大きく弱体化する。

- ・扶桑、山城

- ・対要塞用突撃装備一式

全身を覆う大量の装甲と重くなつた本体を強引に高速移動させるロケットブースターの装備一式。

移動しない目標物に対し非常に有効だが同時に装備できる主砲は1つのみなので火力が大きく落ちてしまう。

- ・空母

- ・赤城

・対近接用大型ブライヤー

空母の近接での撃沈率の高さから考案された近接防御兵装。

赤城の口と連動しておりその形状はさながら駆逐艦イ級。

赤城の食欲に連動してしまった欠点を持つ。

・翔鶴、瑞鶴

・稼働力強化型エレベーター

格納庫から甲板まで艦載機を素早く移動させるためのエレベーター。従来型比較で約17%ほど早く甲板へ艦載機を移動できる。

ただし各部品の寿命が短く定期的なメンテナンスが必要。

・飛鷹、隼鷹

・大型艦載機用カタパルト

飛行甲板の短い、もしくは速力の低い空母向けの兵装。

大型空母でのみ運用できたサイズの艦載機を発艦させれるほどの推力をあたえる。

甲板の磨耗が激しい。

以上

なお上記試験に関して出撃毎に装備の変更等ある艦娘は省く

# 老兵、海原を往く

「接続良好……よし……いけます、大和さん。」

工廠内にて大和に新品の艦装が取り付けられていく。

「随分と形が変わっていますね……おまけに軽い……」

「申し訳ありません。うちで預かっていた試作品なのでだいぶ勝手が違うかと思いま  
す。」

「いえ……これで時間稼ぎになるなら!」

簡単な説明と調整を済ませて大和が着水する。

「改めて……約1時間。あなたの神経系が耐えれるギリギリの仕様です。貴重な試作品  
です。必ず持ち帰って下さい。」

「絶対に……帰つてこい……」

涙ぐむ提督を見つめながら大和が艦装の出力を上げる。

「……指輪を頼みます、中将……」

指輪を預けた大和は微笑み、久しい実戦へと戦艦大和として向かつていった。

20分ほど経ち敵との交戦が始まる。

改めて近海まで入られた事を痛感する。

敵艦載機からの至近弾には目もくれず敵主力へと突き進む大和。

「えつ・・・大和さん！ どうして！」

「皆さんは撤退して補給を！ ここは戦艦大和が稼ぎます。」

「でもあなたの艦装は・・・えつ！」

大和を見て2度驚く瑞鶴たちを下げ1人海原へ立つ。

決死の単艦突撃。それでも稼げるのは1時間。

(歴戦の戦艦・・・その最後がこれですか・・・)

虚しくもなる。だが顔を上げ敵を見据える。

頭痛に耐えながら主砲の照準を合わせ大きく深呼吸。

(せめて落とせるだけ落としますよ！ お覚悟を！)

「戦艦大和、推して参ります！」

彼女の主砲が一斉に放たれる。

凄まじい爆音。だが大和はこんな甲高い音だつたかと疑問に思つた。

光輝く弾頭が大和の想定以上に真っ直ぐに、そして速く敵へ飛ぶ。

刹那、着弾せずそのまま貫通。狙つた敵の後方の敵すら居抜き射線上にはまるで空間

を切り取つたかのようだに大穴が開いていた。

「ん？」

思わず声が出る大和。

明らかに普通じやない火力と弾速。

「ん？」

それは鎮守府でも起こつていた。

「特佐、大和につけた艦装は一体・・・？」

「大和型艦娘用電磁誘導式多段階加速砲・・・我々技術者はあれをレールキヤノンと呼んでいます。ソレを扱えるだけの火器管制と機関を積んだのです。彼女の規格では1時間強で神経系の接続が不可能になつてしまいますが1時間あれば充分かと。事前に説明したはずですが・・・」

目が点になる鎮守府一同。

「れーるきやのん？この子つて普通の主砲じやなかつたんですね・・・最近の艦装はハイテクですね・・・でもこれなら！」

疑問を抱きながらも大和は時間稼ぎから敵の殲滅へと目標を変え戦つていた。  
そして修復の完了した艦隊が前線へ復帰。その頃には敵艦隊の2／3程を大和が

消し去るという状態。

制限時間を考慮して大和を下げるも充分に前線を押し上げれる。  
士氣も上がった艦隊が前へ前へ突き進んでいた。

「すみません・・・身体が急に重たくつて・・・」

鎮守府へ着くなり腰をついてしまった大和。

提督が駆け寄り抱きしめる。

「無事でよかつた・・・ありがとうございます・・・」

「提督・・・皆が見ています・・・」

大和の指に指輪をはめ、2人はあの男へと向き直る。

「あなたのお陰で助かりました。これで私はまた戦えます。」

「ちよつと待つてください！もう大和さんは戦えませんよ？」

「どういうことです？」

「もうあなたの神経系は艦装の使用に耐えれないんです。艦装を解除して生活する分には問題ないですが・・・この火器管制、滅茶苦茶に負担乗るんです。あなたはもう海に浮くことすらままならないですよ！」

驚く大和。若干ショックを受けつつ押し黙ってしまう。

「ならこれで秘書艦に専念できるな。改めてよろしく大和。指揮に戻るぞ。」

「前向きに考えよう」と提督に促されヨロヨロと立ち上がる大和。それを支える提督。

「提督に肩を借りながら作戦室へと戻る2人。

「中将、後でラーメン、忘れないでくださいね。」

「少しは空気を読め・・・まあありがとう・・・助かつた。」

味方増援が来て勝利するまであと10分ほど・・・